



「パリのレスト
ランで」
1985（昭和60）
年2月26日
向かって左から
宇津宮功、上田
浩司、百瀬寿

宇津宮 功 〈初期のころの断章〉

中村 光紀

宇津宮功作品と初めて出会ったのが、1973（昭和48）年、盛岡市中ノ橋際（現ブラザおでつて）のかどにあった「M画廊」（貸ギャラリー）で開催された個展の時であった。この年は、県民待望の文化施設「岩手県民会館」が開館、その記念展として開催された岩手日報社主催の「ザツキン大回顧展」が、私の美術展企画の始まりであった。

1945（昭和20）年盛岡市に生まれた宇津宮功が、1967（昭和42）年武蔵野美術大学を卒業後渡仏してから6年、県内で初めての作品発表であった。前年末から開催の京都・東京両国立近代美術館主催「ヨーロッパの日本人の作家」展への招待出品を受けての帰国で、盛岡の個展は、彼の岩手高校時代の恩師小笠原哲二と画家村上善男が尽力して急遽実現したものである。この時、私と同じ岩手中学・高校の同窓生であることを知った。

50号大の巨大な白黒の「ドローイング」作品は、黒のコンテで真っ黒に塗りつぶされた人体だが、いわゆるアカデミックな人物表現ではない。ハイヒールを履いた太もも露わの足などがニョキニョキと画面を占め、その体の部分をアトランダムに組み合わせた白黒の大画面には驚いたが、非常に強い訴求力があり魅了された。誰にもない独特な宇津宮ワールドの展開を告げるものであった。渡仏してまもなくの頃、このときのような真っ黒く塗りつぶした人体デッサンを、フランスのデッサン教室で、パリ国立美術学校の教授に見せたところ、「日本には北斎



「夜のセヌ川
沿いを散歩」
1985（昭和60
）年2月26日
向かって左から
宇津宮功、上
田浩司、中村
光紀



「学芸欄に掲載したインタ
ビュー記事」(中村光紀記)
『岩手日報』1985（昭和60）
年2月26日

に代表される日本画はもう存在しないのか」と言わしめた、彼のシュールな「人間風景」の原点である。

その2年後1975（昭和50）年、MORIOKA第一画廊で開かれた個展会場で、彼と初めて会った。出品作は二番目のシリーズ《折りたたまれた人間達》で、白黒の世界から一転して雌雄両態の人物を色彩豊かに描いている。社会生活の軋轢からの解放を願う人間達を折りたたみ、「摩訶不思議な生き物を作り上げた」ものという。自由自在な意識の流れを記録するため、スプレーを使用して非常にカラフルな画面にしている。スプレーを使った絵作りは、最初のシリーズ《干涉》（1971-72）から、1981年で終了した《折りたたまれた人間達》まで続いた。しかし、その制作のため、アトリエ空間に充満したスプレーの有毒ガスにより、次第に心臓肥大の健康障害が起き使用を断念する。

その後1980年代からは、筆を使うフリーハンドに戻り、絵具の厚塗りで作作者の原風景である北上川での少年の夢、《黄色い河》シリーズにたどり着く。松尾鉦山の鉦毒水の中和で黄色くなった北上川の色や幼い頃に溺れかけた記憶、舟っこ流しの風景などの幼少からの知覚体験のイメージを、人間存在の不安と結びつけ描かれている。またこのシリーズの時に、スプレーのとき中断していた「白黒デッサン」の制作も復活した。後にパリの有名画廊主オーダーマットに評価されるきっかけになった素描である。



1984（昭和59）年、岩手日報社が開催した「栄光のフランス絵画展」（11月22日—12月16日）を記念して「ヨーロッパ美術の旅」（翌年の2月18日—26日）を企画して同行した。旧ソ連邦、スペイン、フランスの順で三カ国を回り、主にレニングラード（現、サンクトペテルブルク）のエルミタージュ美術館、マドリードのプラド美術館、パリのルーブル美術館を見学する旅であった。最終のパリで一日、旅行に参加したMORIOKA第一画廊主の上田浩司、版画家百瀬寿と一緒に、パリ在住の宇津宮功と久し振りに会ってボンビドー・センターやパリ市立近代美術館（パレ・ド・トーキョー）などをめぐり交流、歓談した。

出発前に、岩手日報学芸部の六岡康光デスクから、パリで活躍している宇津宮功に是非会って制作などについて、インタビューするようにと言われ、取材して書いた記事を再掲載する。旺盛な創作意欲がみなぎっていた彼40歳の時で、取り組んでいる制作のこと、パリの美術状況などを語っていただいた。1985（昭和60）年3月15日の夕刊学芸欄トップ記事であった。

『学芸 最前線』⑧ 画家—宇津宮功氏

—パリを拠点に、個展控えて制作中 表現方法変える—

『海外で活躍する数少ない県人作家の一人。パリに住み着いて18年になる。言葉にも不自由しなくなり、パリっ子ぶりが、すっかり板についている。サンジェルマン・デュプレ教会前の、



「岩手高校OB有志」

2014（平成26）年10月20日（大宮政展オープニングパーティー、ギャラリー彩園子にて）

向かって左から
村井睦平、松坂英孝、
高原光男、宇津宮功、
重茂佳伸、中村光紀

岩手高校OB有志による「石桜モナルナス 一岩手高校OB8人展— DM
2015（平成27）年
11月2日—7日（会場：ギャラリー彩園子Ⅰ&Ⅱ）

石桜モナルナス

—岩手高校OB8人展—

宇津宮 功 (80歳)
重茂 佳伸 (80歳)
高原 光男 (80歳)
中村 光紀 (80歳)
松坂 英孝 (80歳)
村井 睦平 (80歳)
村上 誠 (80歳)
重茂 収 (80歳)

2015年11月2日—11月7日

10:00—18:00 休館日：11月3日

会場：ギャラリー彩園子Ⅰ&Ⅱ

かつてサルトルやポー・ボワール、ヘミングウェイが通ったカフェ・ド・マゴーで会った。

「4月初旬に個展をやるので、制作にかかりつきです。サントノール通り83番地にあるオーデルマット画廊が会場です。油彩15点を展示しますが、全部100号にする予定です」。もちろん個展に合わせて絵をかいているわけではない。画家だから絵をかくのが日課で、特に宇津宮氏は、サラリーマンが勤めに通うように、毎日動機にアトリエにこもり、一定の時間、制作と思索をする。

「数年前までの“折りたたまれた人間”シリーズのころは、エアブラシを使って表現していたが、型にはまり限られた範囲の表現になるため、いまは筆だけでかいています。際限のない感じがとてもいい。筆でかき始めて、既に40点ほど完成させています」

表現の範囲を広げるため、技法を変えたということは、絵の内容も変わってきていることを意味する。

「今、手がけている作品は“黄色い川”という題です。それも観念の川で、自分ではコンセプト・リバーと言っています。この主題を始めて3年目になります。黄色色を使っているのではなく、自分が黄色人種だからということでもない。もっとも、パリ在住の日本人グループで“黄色いグループ展”というのをやっている人たちもあります」

人種を超えた存在論的なテーマということなのか。そういえば、少年のころ見た北上川の濁

った水の色が、強烈な印象として残っていると語っていた。

「今は、個展をひかえての制作ですが、昨年の秋には西ドイツのシュトゥットガルトのエディション・ガイゲエー画廊で、デッサンを含む25点で個展をしました。地元の新聞で紹介され、成果がありました。私の仕事はドイツで発表する方が合っているようです。2年後にまた開催の約束ができました」

宇津宮氏の活動の場はパリが中心だが、西ドイツのほか、世界有数のコレクターが集まるベルギーも重要な発表の舞台になっていて、2年おきに4回の個展を開いている。

「パリも不況で、ポンピドー・センターはいつも混雑している。特に日曜は無料なので入り切れないほど。金のない若いカッブルが行くのにちょうどよいのかもしれない。ポンピドーでは最近、アメリカの抽象表現の代表作家ジャクソン・ポロック展が初めて開かれ、評価されたようだ。これまでは現存作家の個展は公共の大きな会場ではできなかったが、文化大臣ジャック・ラングによって、グラン・パレなどでもできるようになった。文化に金をかけ、若い人にも積極的に機会を与えるようになっていきます」

もはや世界の美術の中心地でないといわれるパリが、巻き返しを図っているということのようであった。』



オーデルマット画廊はパリ有数の大画廊の一



「石桜モンパルナス 一岩手高校OB8人展一」の出品者 2015（平成27）年
向かって左から
重茂佳伸、高原光男、松坂英孝、村上誠、薫谷収、中村光紀、村井睦平、
右上：宇津宮功、

「石桜モンパルナス 一岩手高校OB8人展一」の会場に展示された宇津宮功作品 2015（平成27）年



3098.05.02

つで、宇津宮は1983（昭和58）年念願の画廊の専属作家になることが出来た。この画廊主の扱う作家はピカソを始めフランシス・ベーコン、私の好きなロシア人抽象画家ポリヤコフなどの巨匠作品に、無名の若手作家を発掘して世に送り出している目利きの画商としても知られていた。正式の契約書のサインは翌年の2月1日、3年の契約期間であった。

下世話な話だが、作家が画商と専属契約を結ぶ場合、気になるのはその金銭などの条件である。彼の著書『パリの絵描きの夢舞台』（未知谷、2010年刊）に、その内容が記されているので紹介したい。「内訳は、月XXフラン保証、16万フラン以上売り上げの場合4割が作家の取り分。旧作については作家の自由にできる。新作を私が売った場合は画廊に4割を支払う。絵の保険は画廊負担。個展は作品が出来次第」とある。契約に至るまでの画商との丁々発止のやり取りが描かれて興味深い。

オーダーマットはとくに宇津宮の黒のコンテ・デッサンを好んだという。宇津宮の作家人生にとって一つの大事なステップであったと思う。



「閑話休題」

2014（平成26）年10月20日から「大宮政郎展」がギャラリー彩園子で開かれ、そのオープニングパーティーのとき、岩手高校で美術教諭小笠原哲二から薫陶を受けた宇津宮功ら6人

の美術関係者が偶然に集まった。宇津宮のほかギャラリー彩園子の画廊主村井睦平（画家）、鉄器デザイナーの松坂英孝、画家の高原光男、重茂佳伸と私である。このメンバーに同じ絵画部出身の画家村上誠、彫刻家の薫谷収を加え、一度展覧会をやろうと盛り上がった。この仲間による初めてグループ展である。彩園子の村井が画廊のⅠ、Ⅱを会場として提供しようとなった。

その後、グループの名前をどうするか、いろいろ検討し出身校の岩手中学・高校の建学の「石桜の精神」を使い、「石桜モンパルナス」とした。20世紀初頭パリのモンパルナスには世界中の多くの画家が住み着いてエコール・ド・パリが形成された。それに因み1930～40年代にかけて池袋の近辺にあった「アトリエ村」群に松本竣介、鶴岡政男、難波田龍起ら多くの画家や詩人小熊秀雄らが集い交流したことから、後年「池袋モンパルナス」と呼ばれた。そこで、宇津宮がパリ在住のこともありモンパルナスを借用してグループ名にした。

「石桜モンパルナス 一岩手高校OB8人展一」（会期：2015（平成27）年11月2日から7日、会場：ギャラリー彩園子Ⅰ&Ⅱ）

出品作品は絵画、鉄器デザイン、彫刻など約70点。宇津宮功の変形80号、村上誠の100号の大作や発表が珍しい彩園子画廊主・村井睦平の抽象画など多彩な内容で、多くの鑑賞者が訪れて話題を呼ぶことが出来た。